

News Letter

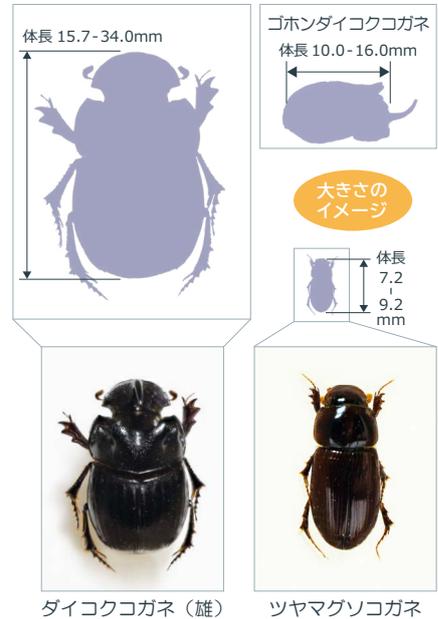
巻頭工ッセイ

糞虫に魅せられて

東北支社 自然環境研究室 上森 大幹



ゴホンダイコクコガネ *Copris acutidens*



ダイコクコガネ (雄)

ツヤマグソコガネ

それは、幼少期に参加した林間学校での出来事でした。体育館の隅に溜まったホコリの中に、私は1匹の虫を見つけました。健気に動いていたその昆虫は小指の先ほどの大きさで、頭に長い角が1本、他にも4本の鋭い角があって特徴的な姿でした。あまりのカッコ良さにただただ魅了され、思わず握りしめていました。

家に帰るなり調べたところ、その特徴からゴホンダイコクコガネという名前前の、ダイコクコガネの仲間であることがわかりました。そして、見た目もさることながら生態も面白い、糞虫(ふんちゅう)という生きものであることを知り、大きな興味を持ちました。

これが、私が糞虫に強烈な憧れを抱くようになったきっかけです。

糞虫。糞を利用する昆虫は多く存在しますが、中でも糞虫と呼ばれる昆虫は、ヒト、イヌ、ウシ、ネズミなどの主に哺乳類の糞を食物とするコガネムシ類を指します。有名なものでいうと

ファーブル昆虫記に登場するフンコロガシでしょうか。

特に興味を持ったダイコクコガネ(*Copris ochus*)は日本最大の糞虫で、その生態は、ウシやシカなどの糞の直下に坑道を掘って深さ20~30cmあたりに育児巣を造巣するというものです。幼虫を育てるための餌となる糞を坑道内に貯めておき、そこから必要な分の糞を切り分け3~5cm程度の決まった形の育児球を作ります。雌は卵を産み付けた育児球を育児巣に並べ、幼虫が育つまで、育児球に発生するカビやウジなどを除去して世話をします。賢く、甲斐甲斐しく子育てに勤しむ愛らしい姿を想像するだけで心を打たれませんか？

開けた草地を好む糞虫の生息地は、近年、酪農業の衰退による放牧草地の減少や高原などの開発の影響により減少傾向にあります。四国や一部島嶼部を除いて日本全国に飛び地的に分布しているダイコクコガネは、2024年11

月現在、環境省レッドリストでは絶滅危惧II類、33都道府県のレッドデータでも何らかのランクに選定され、うち7府県では絶滅とされています。

そのようなダイコクコガネと運命をともにするのがツヤマグソコガネ(*Aphodius impunctatus*)というコガネムシです。ダイコクコガネが坑道内に用意した糞を横取りして利用する「盗食寄生」によって幼虫を育てます。寄主となったダイコクコガネは巣を放棄するといわれており、ダイコクコガネからすれば厄介なお客。しかし、ダイコクコガネが減少の一途を辿るのに伴い、こちらも現在、著しく個体数が減っているとされ、熊本県と大分県では絶滅危惧I類に選定されています。

握りしめた小さな指をこじ開けて逃げようと、力強く暴れたの夏の日の感触。今も手の中に残る、幼い時の鮮烈な体験をきっかけに惹き込まれた糞虫の世界を守り、未来の子どもたちへ残していきたいと、心から願っています。

目次

エッセイ	糞虫に魅せられて	1
レポート	目指す姿は 居心地のよい里山林	2

インタビュー	いきもの好きの履歴書 vol. 7	4
連載漫画	びっくり!目からウロ子ちゃん	7
ある日の フィールドノートから	ハチクマの渡りの楽しみ方	8

ちいかんの**森**づくりプロジェクト目指す姿は
居心地のよい里山林

技術本部 副本部長
佐々木 孝太郎

当社の知見や技術を投入するとどのように自然が育つのかを示したい！という願いを込めながら荒廃した緑地の再生に挑戦する「ちいかんの森づくりプロジェクト」。里山林整備の展望を描きながら1年かけて事前調査を実施した結果、当地のポテンシャルや課題が見えてきました。保全管理計画が策定された後にはよいよ本格的な活動が始まります。

見えてきた「西黒川特別緑地保全地区」（神奈川県川崎市）のポテンシャルと課題

2023年秋、当社は川崎市と保全管理に関する覚書を交わしました。

「西黒川特別緑地保全地区」の市有地を中心としたエリアを活動の場とし、里山林整備の展望を描きながら1年かけて事前調査を行った結果、この地が持つポテンシャル（潜在能力、将来の可能性、発展性）や課題がより鮮明になってきました。

ポテンシャル

- 潜在能力
- 将来の可能性
- 発展性

ナラ枯れ被害が目立つものの、アズマネザサが繁茂した斜面は、ある程度ナラ枯れを回避できていた。

オオタカとツミがバードバスへ飛来。生態系の高次捕食者である猛禽類は、繁殖確認はなかったが森の利用が確認された。



バードバスに飛来するツミ

フクロウは確認できていないが、餌となるネズミは自動撮影カメラで多数確認されているので、巣箱をかければ利用してもらえるかもしれない。

林床はササ藪が多いが、藪が薄い場所には山野草がそれなりに残存している。

雑木林の良く知られた昆虫（クワガタ、カブトムシ、セミ等）は普通に生息。

丘陵地の谷戸に特徴的な生物（ゲンジボタル、オニヤンマ、ヤマサナエ、ホトケドジョウ、サワガニ等）も生息していた。

中型獣（アナグマ）が利用している巣穴が確認された（コアエリアが存在）。



巣穴（右端）に出入りするアナグマ

活動エリアの特徴

課題

三沢川の源流に位置するので、水源涵養機能の維持が求められる。

樹木が成長し高木化したことで、谷の農地が日陰になる時間が増えている。

植生遷移も進行しており、植生調査結果を見てもコナラ林（落葉広葉樹林）とシラカシ林（常緑広葉樹林）の種組成に大きな違いは見られず、高木層のクヌギ、コナラが枯死するとシラカシ林に移行する可能性が高い。

ナラ枯れが目立つ。被害木は内部にナラ菌が増殖しているので腐朽の進行も速い。道や農地沿いの被害木は早期の伐倒が必要。

下刈りが施された場所ほど、カシノナガキクイムシがトラップで多く捕獲された。今後、本格的な下刈り作業を行うと被害木が増える可能性がある。



捕獲した大量のカシノナガキクイムシ

アライグマの自動撮影カメラでの確認頻度が高く、カエル類、サワガニ、農作物等の食害が疑われる具体的事案がある。



水辺で食べ物を探すアライグマ

森林整備、管理作業で発生する伐採木、ササ、落ち葉の処置をどうするか？

ササ藪がひどすぎて、林内は「散策」ができる状況ではない。

目指す森の姿 — 保全管理計画策定に向けて —

西黒川特別緑地保全地区のポテンシャルと課題をふまえ、「ちいかんの森づくりプロジェクト」では以下

に示す「森づくりの基本理念」及び、理念を実現するために必要な「保全管理の基本方針」の案に基づき、「生

きものの賑わい、居心地の良さを体感できる里山の森」を目指していこうと考えています。

森づくりの基本理念(案)

「里山」であることを認識し、その土地に生活する方々への配慮を念頭に置く(主に農地)

生きものに対し、多様な生息・生育環境を提供(生物多様性の確保)

地元の方々が「生きもの」とふれあい、「里山の自然」を体感できる場を提供

環境教育・研修・研究・体験の場を提供

保全管理の基本方針(案)

里山特有の「環境タイプの多様性」を創出することで、そこに紐づく「生物多様性」を実現する。

「育てる」「守る」「利用する」の3つのアプローチで環境の多様さ、質の維持・向上を図り、管理作業の持続性を担保する。

具体策

育てる

「多様な環境」を育てる

現況の植生を活かしながら、伐採や下刈り等によって様々な環境タイプを創出。環境に変化をもたせませす。

生息地を育む

フクロウの生息を願って巣箱を設置。落ち葉や伐採木を集めたエコスタックで昆虫、は虫類等の生息空間を創出するなどします。

守る

農地の日照を守る

周辺を低木林や草地の状態にして維持し、日当たりを確保します。

四季の景観を守る

森や草地を手入れし、美しい花を咲かせ山野草など動植物の環境を守ります。

アナグマの生息地を守る

巣穴が確認された場所の周辺を、コアエリアとして保全します。

水辺の生きものを守る

カエル類やサワガニがアライグマによる食害を受けている可能性があるため対策を講じます。

健康な森を守る

整備の本格化に伴ってナラ枯れが増加する可能性も。当面の間カシナガトラップで対策します。

利用する

研修・環境学習に利用する

雑木林の維持管理作業の研修、自然観察などの環境学習に利用します。

有益な植物の食材を利用する

クリ、カキ、タケノコ、ヤマノイモ、ミョウガ、アケビ、タラノキなど。キノコ栽培も？

ちいかんの森づくりプロジェクトが目指すところ

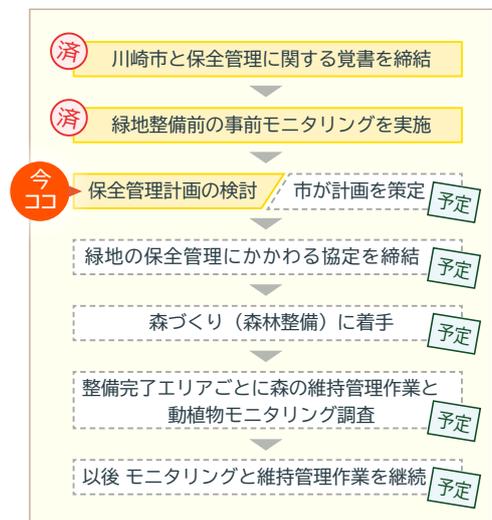
“ 生きものの賑わい、居心地の良さを体感できる里山の森 ”

上記の理念や方針に基づく保全管理計画の策定に向け、川崎市の主催により、森の地権者の方や森に隣接する農地所有者の方々と意見交換を実施しました。地元の方々からは今回の取り組みを後押しする声をいただきましたので、年内には川崎市により保全管理計画が策定される予定です。早ければ年明けには当社と川崎市の間で

管理協定を締結し、本格的な“森づくり”がスタートします。

この緑地が人や生きものにとって「居心地の良い林」に再生されることを願いながら、ここからしばらく、ひたむきに“森づくり”を行う日々が始まります。

活動のようすは「ちいかん森づくりレポート」でも随時紹介します。



森づくりプロジェクトの進捗と今後の活動予定

森づくりプロジェクトの最新情報をお届けする「森づくりレポート」はこちらから
<https://www.chiikan.co.jp/forest>



生きものとの出会いや、現在の仕事に対する姿勢など。
ちいかん社員の普段は聞けない「あんな話」や「こんな話」、ちょっとだけ探ってみましょう！

いきもの好きの履歴書 VOL.7

——今井さんはどういったお仕事をされていますか？

メインは営業職になります。お客様と信頼関係を築きつつ、課題を解決するためのご提案や、より専門知識を持った技術者との橋渡し、サポートなどをしています。また、私自身が担当者としてお客様の課題解決にあたる時もあります。

——お客様との信頼関係構築という面では、今年度の全社功労賞*を受賞されましたね。

営業担当として選んでいただいたことは大変有難いです。選出の理由となった「豊田市自然観察の森」指定管理は、営業担当としてお客様の要望や想いを受け止め、技術者や事務方も含めたチーム全体でしっかりご提案することができた結果であると考えています。当社の新たな事業展開につなげられるよう、今後もアンテナを張っていきたいと思っています。

営業は地道な行為の積み重ねですが、いずれはそれが会社への大きな貢献に繋がるという自信が持てました。

——お仕事をするうえで気をつけていることはありますか？

お客様が何を求めているか、何に困っているか、それにお応えすることが私たちの仕事だと思っています。「求め」に応えられているかどうか、そこは立ち止まって考えるようにしています。

加えて、お客様が気付いておられない点などに対し、より良い成果に向けて提案できることは何かを考える。その視点も忘れないようにしないとと思っています。

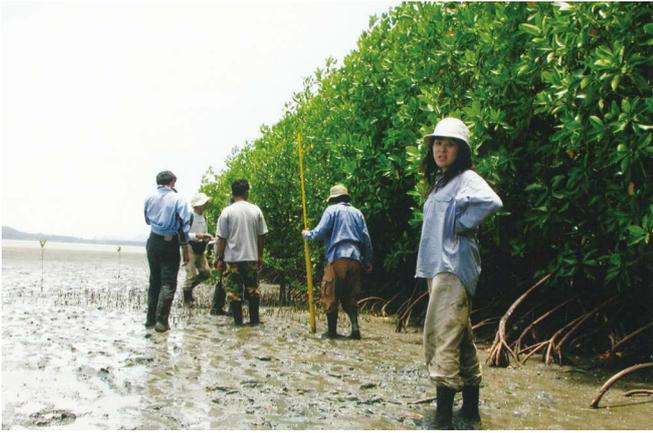
* 全社功労賞：年に1度、全社的な業績への貢献を表彰する当社の制度



Ryoko Imai ● 2012年入社。名古屋支社 自然環境研究室に所属し、営業を主に担当しながら自身も生物多様性推進を中心とした業務を行う。社内横断の営業グループリーダーでもある。活動を続ける知多半島グリーンベルトは23年に自然共生サイトに認定。今日もどこかで生物多様性推進の輪をつなげている。

ネイチャーポジティブ実現のため
異業種の方とのご縁も大切にしながら
新たな動きを作り出したい。

名古屋支社 自然環境研究室／営業担当
主任 今井涼子



タイでのマングローブ調査（大学時代）



マングローブで生活するモッデーン*と呼ばれるアリ（※タイ語）

——この仕事に就ききっかけは何でしたか？

国立公園の任期付きのお仕事が終わって次の仕事探しをしている時、ちいさんの調査補助のアルバイトに応募したのがきっかけでした。面接後、アルバイトの採用とは別の話として、面接をして下さった当時の名古屋支社長から連絡があり、「営業職でやってみないか」と言っていたんです。

営業職は経験もなく、向いているとは思わなかったので一度お断りをしたのですが、それでもぜひ、と強く誘っていただいたこともあって、チャレンジしてみようと思い、入社しました。

——お話をしている中、営業に向いておられるように思いますが、営業の仕事の面白さはどこにありますか？

向いてるんでしょうか？未だに自信はないです（笑）。ただ私は、営業でも業務担当でも、お客様と想いを同じくして仕事ができたと感じられた瞬間が一番嬉しいですね。ご相談いただいていた仕事を、是非ちいさんにと発注していただいた時や、しっかりとした成果品を無事に納められた時、そして何より、そのお客様から再びご相談を頂けた時が、私にとって一番達成感を得られる瞬間です。

——お客様とお話をしていく中で、難しい場面もあると思います。

そうですね。仕事において、広く一

般の方々に生物多様性の保全等を「自分事」として捉えてもらうにはどうすべきか考えなければいけない場面がありますが、自身の経験を重ねても、「自分事」にするのはとても難しいことだと感じます。

私は高校生の時に阪神・淡路大震災に遭遇し、日々の平穏な生活の延長としての明日が決して約束されたものではないのだということを強く実感しました。それと同時に、それまでテレビなどを通して見ていた他の地域の災害が、結局他人事だったということにも気付かされました。とても難しい問題を内包していますが、それでも大切なことは、自然環境について多くの方に自分事として考えていただくために、私たちが自信を持って情報や知識を伝え続けることだと考えています。

——自然環境のプロフェッショナルとしての矜持ですね。元々は自然環境分野の研究をされていたんですね。

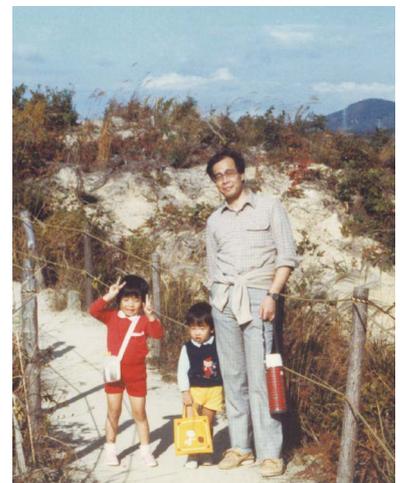
大学では、森林生態学の研究室に入り、卒論ではタイのマングローブ林を、修士論文は国内の森林をターゲットに研究していました。

高校生の頃に「沈黙の春」（レイチェル・カーソン著）などの書物にも触れるなかで、生きもののつながり、生態系の面白さや重要性、そしてそれらが当時も今も急速に失われていっているという事態に対して何かできないか、ということに目が向いていきました。

子供の頃から特定の生きものが好きというよりは、自分の目の前に広がっている、様々な生きものがつながって形成されている森林などの自然環境が好きで、それは今も同じです。

——生きものとの最初の出会いは何でしたか？

特に思い出されるのは、母の実家の裏の用水でのザリガニ捕りです。いとことバケツいっぱい捕って遊んでいました。父の実家では、祖父手製の網でメダカ捕りもしました。いずれも小学生の時です。そのほか、家族でよく自宅近くの六甲山系の山にハイキングに出かけたり、夏休みの自由研究で尾瀬の花をテーマにしてみたり。自然や生きものの記憶は、家族との楽しい思い出と強く結びついています。



家族で六甲山系へハイキング（幼稚園時代）

——今のお仕事はそういった思い出からつながっているんですね。

はい、営業職は人とのお付き合いですので、思いが噛み合わない時は辛いときもありますが、やはり子供の頃から興味のあった仕事に携われていることは幸せですね。また、私たちの仕事の一つ一つは多少なりとも未来の自然環境に貢献できていると信じていますので、そういった意味でもやりがいと使命感を感じています。

そして、社内には私よりもずっと生きものに精通した技術者がたくさんいるので、それだけで楽しいです。

——今後ご自身が目指していきたいお仕事はありますか？

最近、全くの異業種の方と交流する機会が増えてきました。自分たちの業界の常識が非常識であることは、どの業界でもあるかと思いますが、目から鱗の新しい視点に触れる機会を得られて、とても新鮮です。

ネイチャーポジティブの実現のため、誰もがみな生物多様性保全を自分事として行動しないと間に合わないと言われている今、異業種の方々とともに、新たな切り口から、新たな力強い動きを作りだすことができないか、そ



尾瀬の大江温原（小学生の時に妹と）



30年後に娘と（左の写真とほぼ同じアングルで）

ういうことができると思うと面白いなと思っています。日々の仕事に誠実に向き合っ、ご縁を大切につなげていきたいと思っています。

——今井さんが入社されたのも、一つのご縁ですね。

そのとおりだと思います。ちなみに、私の座右の銘は「運も実力のうち」です。自分の力だけではどうにもならないことが多々あって、でも時々うまくいくのは、そこに「運」があるからだと思っています。

また、「運」＝「ご縁」だと私は思っています。仕事は人と人とのつながり、つまりご縁で出来上がっています。良い仕事は良いご縁の中からはか生まれれてこないと思っています。ですので、人とのお付き合いは、面倒がらず真摯に正直にしていきたいです。



今井さんの座右の銘
「自分ではどうにもならないことも時々うまくいくのは、運があるから」それは、良いご縁を大切につなげていくことと同じであるとも話します。



——おっしゃるとおりだと思います。ご家族とのつながりも大切ですね。

そうですね。私にとってとても大切な存在で、家族との時間はかけがえのないものです。

そして、6歳の娘の日々の進化がすごく面白いです。特に教えていないのに、様々に興味を持って進化していくので、人はこうやって人になっていくんだなあと、この6年観察（笑）しながら子育てをしてきました。

——最近ご家族で楽しんだ事はありましたか？

最近、近所の用水路で捕獲したドジョウ（たぶんどジョウとカラドジョウ）、ヨシノボリの一種、フナの一種を自宅で飼い始めました。餌やりは娘の当番です。

よく考えると、両親が私にしてくれていたことと同じようなことをしているなと思います。

——最後にこの業界、もしくはちいかんで働くことを目指す人に、アドバイスはありますか？

「自分の好き」を大切にしていきたいです。「好きこそものの上手なれ」といいますが、この業界は「生きもの」「自然環境」が好きという気持ちが根底にある人ばかりです。その熱量や興味の対象は人によりもちろん異なりますが、それぞれの気持ちを大切にして、行動や言葉に表していれば、必ず良いご縁があると思います。

取材日記

企画、取材：経営推進部 森田 哲朗

「ちいかんで働く人達」にスポットを当てたインタビュー企画の第7弾。今回は営業担当の方を紹介します。ちいかん社員は生きもの調査や解析を通じてお客様の課題を解決し、信頼関係を築くことで、次のお仕事に繋がっていきます。技術的な部分から営業的な部分まで幅広い役割をこなしつつ、より自分の得意な事で勝負する。それがちいかんの仕事のスタイルです。中でも、今井さんはよりお客様に近い場所で活躍をされています。いつでもフレンドリーで明るく、楽しい話題が尽きません。インタビューをしているつもりが、いつのまにか私の方が自分の事を色々お話ししてしまったり… 人に心を開かせるのは、きっと今井さんご自身が人や自然が大好きで、オープンマインドで接してくれるからなのでしょうね。とても勉強になりました。





多様なカラーバリエーションをもつ
ハチクマ

皆さんは「ハチクマ」という鳥をご存じでしょうか。

ハチクマ (*Pernis ptilorhynchus*) はアジア大陸中部より東に分布し、日本においては北海道、本州、四国、九州で繁殖する大型の猛禽類です。スズメバチをはじめとしたハチ類の幼虫や蛹が好物という変わった生態をもち、大型猛禽類のクマタカと姿が似ていることから「ハチクマ」の名前が付けられました。

さてこのハチクマですが、私が現在住んでいる九州を含めた日本全国にて、春と秋に飛来する渡り鳥としても有名です。九州におけるハチクマの渡りシーズンは9月中旬から下旬頃。ハチクマの渡りを見るべく、私はこの秋も早速観察に向かいました。

とある山に到着後、展望台から少し離れた開けた草地にて三脚を立て、スコープとカメラと双眼鏡を準備。その後、山々の上空や鉄塔の隙間へ向けて双眼鏡を覗きこみます。ハチクマは全長が雄で約56cm、雌で約60cm、翼開長が125～142cmと、トビと同程度の大きさのタカの仲間です。遠方で飛んでいる場合はシルエットで判断する必要がありますが、ハチクマは他のタカと比べて頭頸部が翼の前縁から細長く突き出して見えることから、トビと同じぐらいの

ある日のフィールド・ノートから

ハチクマの渡りの 楽しみ方

大きさで、かつ頭の小さな飛翔姿を根強く探します。しばらく双眼鏡を覗いていると、遠方にて上昇気流に乗ってクルクルと飛翔しながら高度を上げるハチクマ達のタカ柱を発見できました。その日は気象条件等がよかったためか、比較的低い位置で頭上を多数通過・滑翔していくハチクマ達の姿をカメラに収めることができました。

ハチクマは非常に多様な羽衣をもつことでも知られています。ハチクマ達が近づき、その羽衣がどのようなものなの



ハチクマの集団

- 参考文献 日本の上の鳥の世界 (樋口広芳, 株式会社平凡社 2014)
BIRDER SPECIAL タカの渡り観察マニュアル (久野公啓, 株式会社文一総合出版 2024)
BIRDER SPECIAL 日本の渡り鳥観察ガイド (先崎理之・梅垣佑介・小田谷嘉弥・先崎啓亮・高木慎介・西沢文吾・原 星一, 株式会社文一総合出版 2019)

かがわかる瞬間がとても楽しく、それらを観察することもハチクマの渡り観察の醍醐味です。

樋口広芳らによるハチクマをはじめとした渡り鳥の衛星追跡の研究によりますと、今回私が観察したような秋の渡りでは、ハチクマは九州北部から東シナ海へ離岸し、そのまま中国南東部を経て越冬地へ渡っていきます。一方、春の渡りにおいては、越冬地から大陸に入り、中国を北上した後に朝鮮半島を南下して5月上旬頃に九州北部へ渡ってきます。また、その年生まれの幼鳥は秋に日本を経由して越冬地に渡った後、春は渡りを行わずに最初の夏をそのまま越冬地周辺にて過ごすことがわかってきています。

つまり同じように見えるハチクマの渡りでも、季節によっては経路も異なるうえに、春の渡りはそのほとんどが成鳥や2年目以降の若鳥によるものなのです。

次の春の渡りのシーズンは、日本に至るまでの長い道のりに思いを馳せながらハチクマ達を観察してみたいでしょうか。

(九州支社 自然環境研究室 折戸 咲子)

News Letter No. 56 2024年12月

【発行】……………株式会社 地域環境計画

● 発行人……………高塚 敏

● 編集……………釣谷佳子・永沢敦子

岡崎康代・亀井光子・荻本 央

素朴な疑問やご感想などお寄せください。お待ちしております。E-mail: nl-info@chiikan.co.jp

株式会社
地域環境
計画 生きものと共生する
地域づくり人づくり
ちいかん

■本社 ■技術本部 ■企画営業本部

自然環境研究室
環境共生推進部

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDSビル

TEL : 03-5450-3700

https://www.chiikan.co.jp

■北海道支社 TEL: 011-717-8001

■大阪支社 TEL: 072-684-3182

■東北支社 及び TEL: 022-727-5223
野生生物管理部

■中四国支社 TEL: 084-973-3733

■名古屋支社 TEL: 052-760-2822

■九州支社 TEL: 092-833-5270

運営
サイト

鳥獣被害対策.com

鳥獣被害対策
商品販売



Nature Clips

あなたに合った
自然の楽しみ方をご提案



グループ
会社

株式会社 エスアイエイ環境事務所 (栃木県高根沢町)



お彼岸のお墓参りで帰省した際、柿の木の葉が茶色に変色しているのが目に入りました。地域の柿の木や桜の木が同様の様子で、外来の昆虫「アメリカシロヒトリ」が原因らしいです。幼虫はふ化してから2週間ほど蜘蛛の巣のような巣網を張り、葉を食べては移動を繰り返しながら成長して各地へ拡散するとか。毎年干し柿を楽しみにしている私にとっては迷惑な昆虫です。近所の農家さんに駆除方法について聞いてみたところ、「巣網を見つけたら枝葉ごと切り落とし、憎しみを込めて踏みつぶす！」だそうです(笑)。この冬も干し柿が食べられますように。(永沢敦子)